

mustの多義性：丁寧さと自律性との関係

高橋 正

0. 論文の目的

強い義務を表す must と have to には主観性と客観性の違いや義務の強さ・談話機能に違いがある。両者の用法を比べると、must の方が have to よりも多義である。must は主観的で強い義務を表すので、主観的で強い義務を表す方が多義であることになる。have to と比較しながら、主観的な強い義務の must の多義性を丁寧さ (politeness) の観点と、英語文化の重要な概念である「個人の自律性」の観点から捉えなおすのがこの論文の目的である。

1. ポライトネスと自律性

1.1 ポライトネスと must の用法

Brown & Levinson (1987) によれば、人間には、人と関わる時に基本的に2つの欲求がある。1つは、他者に理解されたい、好まれたい、仲間だと思われたい、評価されたいというような、他者に近づきたいというプラス志向の欲求である。このような欲求を **positive face** という。もう1つの欲求は、他者に邪魔されたくない、立ち入られたくない、行動を自由に選択したいというもので、マイナス志向の欲求である。このような欲求を **negative face** という。

私たちの日常の発話行為には、聞き手や話し手の face を傷つけたり、脅かしたりする可能性を含むものが多くある。例えば、学校の帰りに買い物をお願いするとき、

相手の行動の自由を束縛することになり、相手のnegative faceを脅かすことになる。また、お金がなくなり、友人に借りるときは、話し手自身のpositive faceを傷つけることになるし、相手にとっては当面使えるはずのお金が自由に使えなくなるので相手のnegative faceを侵害することになる。さらに、約束したことを実行できないということを認めなければならないときは、話し手のpositive faceが傷つけられ、その結果、他のことを約束することになれば同時に話し手のnegative faceが侵されることになる。このようにfaceを脅かす可能性のある行為を**face-threatening acts**といい、FTAsと略す。

Faceを脅かす可能性をできるだけ小さくするために、話し手は様々な配慮をする。Brown & Levinsonによれば、politenessとは「FTAsを行使するときに、基本的な欲求としてのpositive faceやnegative faceを脅かさないように配慮すること」である。このpolitenessはpositive faceに働きかけるpositive politenessと、negative faceへの配慮であるnegative politenessに区別される。positive politenessやnegative politenessを達成する手段・方法をstrategies（方略）と呼ぶ。どのようなstrategiesを用いるかは、発話行為が相手のfaceをどの程度脅かすかという話し手の判断により決定される。

mustは話者の主観的義務をあらわす。話し手が聞き手に何かを義務付けることは聞き手のfaceを脅かす行為になる。次の例では、主語がyouでfor meという表現が用いられているために話し手が聞き手のfaceを脅かす可能性が高い。

(1.1) You must type that letter for me immediately.

この文を受動態にすることによって、話し手や聞き手への言及をさけることができ、だれが誰に向かって義務を課しているのか不明瞭になりその分だけ1.1の文よりも丁寧になる。このような方略は、negative politenessの1つで、“Impersonalize S(peaker) and H(earer)”と呼ばれるもので、1人称と2人称の使用を避けるという形で現れる。

(1.2) That letter must be typed immediately. (Brown & Levinson (1987):194)

1人称と2人称を避ける表現は、次のようなFTAsが社会的な規則や義務であるということを明示することによっても可能である。FTAsのもたらす負荷が話し手や聞

き手とは関係がなく、従って話し手は聞き手にnegative faceを侵害するつもりはないということを伝える方略である。これは、Brown & LevinsonがNegative politenessの8番目にあげている“State the FTA as a general rule”という方略である。

(1.3) a. You will please refrain from flushing toilets on the train.

b. Passengers will please refrain from flushing toilets on the train.

(1.4) a. I'm going to spray you with DDT to follow international regulations.

b. International regulations require that the fuselage be sprayed with DDT. (ibid.: 206)

aの文のyouやIがbの文では3人称の主語になり、聞き手に義務を与える話者は表面には現れない。mustは強い義務を表すために、話者は対人関係を配慮した言語使用を行うことになるが、その1つの方略が“State the FTA as a general rule”である。このような意味で丁寧さの方略という観点から、mustともう1つの強い義務を表す法表現 have (got) toとの用法の違いを捉えなおすが必要である。

1.2 ポライトネスの原理

Leech (1983) はGriceの会話の中に見られる協調の原理 (the Cooperative Principle: CP) をさらに高い次元で規制しているのがポライトネスの原理 (the Politeness Principle: PP) であると述べている。Leechが提案する重要なPPの1つに次のようなTact Maximがある。この行動原理は、命令・依頼・忠告などの行為を行うときに話者が採用する原理である。

TACT MAXIM

(a) Minimize cost of other [(b) Maximize benefit to other]

(a) 他者への負担が最小のものになるようにしなさい [(b) 他者への利益が最大になるようにしなさい]

次のように命令文はすべて聞き手にとって失礼なことになるのではなく、命令されている内容が聞き手にとって負担が少ないものであり、聞き手の利益が多くなるにつれて、命令文は丁寧さを増す。

[1] Peel these potatoes.	聞き手に負担	より丁寧でない
[2] Hand me the newspaper.		
[3] Sit down.		
[4] Look at that.		
[5] Enjoy your holiday.		
[6] Have another sandwich.	聞き手に利益	より丁寧である

[1] や [2] の命令の内容は、聞き手に負担になると同時に、命令の内容が実行されると話し手の利益になる。[5] や [6] では命令の内容は聞き手にとって好ましいことや利益になることである。ここでは、話し手と聞き手のどちらにとって負担なのか利益なのかということが丁寧さの尺度となっている。

次の [7] - [12] では間接性の尺度が丁寧さを決める基準になっている。「電話に出てほしい」ことを依頼する場合に、直接的な命令文よりも間接的の発話行為の方が丁寧さを増す。電話に出てほしいという依頼は聞き手にとって負担になることである。依頼が間接的であればあるほど、話者がためらっていることを示唆し、依頼の発話の力が弱くなる。とくに下の [11] - [12] では仮定法が用いられて、仮想世界のことでしてしかも疑問文で提示されているので、現実世界では依頼は実行されないであろうと話者が悲観的になっていることを示している。

[7] Answer the phone.	間接性 小	より丁寧でない
[8] I want you to answer the phone.		
[9] Will you answer the phone?		
[10] Can you answer the phone?		
[11] Would you mind answering the phone?		
[12] Could you possibly answer the phone?	間接性 大	より丁寧である

間接的の発話行為が丁寧になるもう1つの理由は、間接的な言い方ほど聞き手が依頼されている行為を遂行しないことを選択する自由が与えられているからである。依頼されていることを断る余地があればあるほどその依頼は丁寧なものとなる。[7] の命令文には断る自由が与えられていない。話者が一方的に聞き手に命じている。[8] は平叙文で聞き手は話し手の依頼を無視することができる。[9] - [12] では疑問文の

形をとって聞き手の意向を尋ねる形式であり、聞き手はYes-noで答えることができる形式である。[9] のwill you...? では聞き手の意思を尋ねるのでまだ直接的であるが、[10] では、可能性を尋ねており、電話に出る意思があっても可能でない場合は断ることができる。

聞き手の損益・断る余地・間接性という3つの尺度からmustを含む次の文をみると、

(1.5) You must peel these potatoes.

(1.6) You MUST have another sandwich!

1.5 の文は、通常の文脈では聞き手に負担になることを義務づけることになり、しかも断る余地のない直接的な言い方なので丁寧さは非常に少ない。1.6 の文は、Leech が実際に命令文の [6] より聞き手にとって丁寧な表現としてあげているものである。義務の内容は聞き手の利益になることであり、must に強勢を置くことで聞き手に申し出を辞退する余地を与えないほうがより丁寧な言い方になる。

(1.5') 聞き手負担・直接的・断る余地少ない

(1.6') 聞き手利益・直接的・断る余地少ない

must を用いる場合は、聞き手の利益かどうかということが丁寧さに大きく関わる。must はまた、つぎのようなGENEROSITY MAXIM にも関係する。この行動原理は自己への利益—負担を基準にしたものである。TACT MAXIM は他者の利益—負担を基準にしたものである。

GENEROSITY MAXIM

(a) Minimize benefit to self [(b) Maximize cost to self]

(a) 自己への利益を最小のものにしろ [(b) 自己への負担の最大のものにしろ]

次の2例のうちで1.8が丁寧でないのはこの行動原理に違反しているからである。

(1.7) You must come and have dinner with us.

(1.8) We must come and have dinner with you.

上の1.7-1.8の2例は、主語の人称と義務の内容がmustの用法に関係していることを示唆している。

聞き手に依頼を断る余地を与えるかどうかということがTACT MAXIMの1つの方略であるが、この方略にはさらに深い英語文化の価値観が潜在している。聞き手に負担になる依頼を、断る余地が十分あるにも関わらず、聞き手が引き受けるときに、それが聞き手自身の意思で行われたということを示すような依頼の仕方を話し手が採用しているということである。聞き手が自ら判断して決断できるような表現を用いて話し手は依頼をする。依頼者は聞き手の判断にすべてを託することになる。TACT MAXIMの行動原理には聞き手の自由意思や個人の自律性を重視する文化的価値が隠されている。次節では個人の自律性とmustの用法との関係について言及する。

1.3 Personal autonomy

アングロ文化の重要な文化的価値の1つは、次のような文化スクリプトで示されるような個人の自律性 (personal autonomy) である (Wierzbicka (2006:2.7))。アングロ (Anglo) とは、イギリスやアメリカで英語を母語とするアングロ・サクソン系白人をさす。

(1.9) [People think like this:]

When I do something it is good if I do it because I want to do it,
not because someone else wants me to do it

他の人が何かをすることを自分に望んでいるから自分がそうするという態度はアングロ文化では高く評価されない。何かの行動を起こすときにその行動は自分の意思で行われるものであるということが重視される。さらに、このような価値観は、自分の意思を相手に押し付けることはよくないことであるというアングロ文化の行動基準にもつながる。Wierzbickaはこのことを次のような文化スクリプトで表している。

(1.10) [People think like this:]

no one can say to another person:

“I want you to do this
you have to do it because of this”

[People think like this:]

no one can say to another person:

“I don’t want you to do this

you can’t do it because of this”

この文化スクリプトは、人は好きなことは何でもできるということを表しているのではなく、また、人がやりたいことを妨げるような規則はないということを表しているでもない。他の人の意思によって、自分のしたいことができなくなることや、やりたくもないことを強制されることはないという文化的価値をこのスクリプトは示している。

聞き手にこちらの意思を押し付ける典型的な日常の場面は、聞き手にあることをしてもらいたいと依頼をするときである。相手がこちらの依頼したことを実行してくれる場合に、その依頼を受け入れるのは聞き手の意思や決断で受け入れたということが必要になる。そのために、英語の依頼表現は聞き手の個人的自律性を重んじる言い方となる。命令文 (do X!) は一方的に話し手の意思を押し付けることになるので避けられる。英語では、依頼表現に命令文を避けて can /could you…? / will /would you…? という慣用的表現を用いるのは相手の意向や意思を尊重した依頼の仕方になるからである。

また、聞き手の自律性に配慮した表現に次のようなものがある。

She offered to do X / She invited him to do X

She suggested that he could do X

これらの表現では、最終的にdo Xという行為を受け入れた場合、それは主語のsheに当たる人物の意思ではなくheが指す人物の意思である。相手にこちら側の意思を押し付けないように配慮された表現である。このように、日常的に用いられる定型表現や慣用表現の中にその言語話者の文化的価値観が如実に現れてくる。

個人の自律性に価値を置くアングロ文化では“you must”という言い方を避けるということが予想される。you mustは話し手が義務を聞き手に課するというのが典型的な意味でからである。特に、聞き手が“I can’t”という返事をしたときに、さらに“you must”を繰り返して相手にこちらの意思を強要することはよくない。アメリカ人の主人が客に対して手作りのおいしい食事を目の前にして“you must try this”と言い、それに対して、客が「もう十分に頂いたのもう食べられない」と言っていると

きに主人がさらに“you have to do it because I want you to do it”のようにいうのは失礼なのである。

1人称とmustが共に用いられた場合は話者自らが自分に義務を課すことになる。他者からではなく自らの判断で義務を果たすということの表明は、個人の自律性を重んずるアングロ文化の価値観と一致する。自律性という文化的価値からmustとhave toの用法を再考することがこの論文の目的でもある。

2. must/have toの意味の違いと丁寧さへの言及

2.1 Larkin (1979)

変形文法が支配的であった時代に同義とみなされていたhave toとmustの意味の違いをいち早く指摘した人の一人にD. Larkinがいる。彼が1969年に発表した研究ノートは、McCawley (1976) に2つの注を追加して再録されている。Larkin (1976)によれば、次の文ではmustを用いたaでは、話し手が、自分の娘が10時までに帰宅しなければならないことに同意していることを含意しているが、bではそのような含みは持たない。

(2.1) a. My girl must be home by ten.

b. My girl has to be home by ten. (Larkin (1976):392)

次の文のaでJohnnyの友達が親の言いつけを守って、親に共感してJohnnyに義務を課していることになるとLarkinは指摘する。

(2.2) a. Johnny must play in his own yard today.

b. Johnny has to play in his own yard today. (Larkin (1976):392)

また、次の文のbでは、要請されている行為を行うことを義務づけているものは肉体的な要求ではなく、社会的慣習や礼儀、専制君主的な親といったものが義務の源のように感じられる。

(2.3) a. I must blow my nose.

b. I have to blow my nose.

(2.4) a. Adam must go to the john.

b. Adam has to go to the john.

(2.5) a. I must take a rest.

b. I have to take a rest. (Larkin (1976):393)

このような事実についてLarkinは次のように述べている。

The explanation for these facts most probably has something to do with the fact noted above—the speaker of a *must* sentence identifies himself in some way with the source of the compulsion. [Larkin (1976):393]

つまり、mustでは話者が義務の源に共感しているという意味を伝えたとLarkinは述べている。

Larkin (1976) は1969年に発表した研究ノートに2つの注を付け加えている。その注の中でLarkinは、mustとhave toの違いは対人関係への配慮があることを指摘している。義務の根源的意味では、両者の違いが顕著に現れるのは、文に述べられている義務に対する話者の気持ちが問題となる場合である。聞き手が不利益を被るが、話し手が聞き手との連帯感 (solidarity) を保ちたいと願っている場合には、当該の義務を遂行することに話者が共感していないことを示すのが適切である。そのような場合はmustを用いないでhave toを用いる。次の2例のようにmustを用いると聞き手の不利益になることに話者が共感しているように思われるのでやや不適切になる。

(2.6) Sorry to break up our game, boys, but I {have to / ?must} go pick up my wife.

(2.7) It's time for us to go home now, Harry. It's 2:00 and the bartender {has to / ?must} lock up. (Larkin (1976):396)

次の例ではhave toを用いるよりもmustを用いる方がよい。

(2.8) You must have some of Aunt Marie's pie.

この文は、聞き手はパイを食べたいという決断を下すという負担がなくなり、自分の欲求を言葉で表現する必要がなくなるので丁寧な発話になる。mustの場合は話し手自らがその丁寧な発話を行っていることを示唆するのに対して、have toでは、外から要求されている事態についてただ述べているだけである。話者の共感を示すmustの方がこの場合にはより適切な表現になる。

Larkinの指摘は次のようにまとめることができる。mustは遂行すべき義務や義務

の源に対して話し手が共感を持っていることを示唆する。それに対して、have toにはそのような話し手の関与はなく、義務の報告をしているにすぎない。このような特質のために、mustは遂行発話的に用いられることがあり、義務の内容に関して話者がどのように関与しているかが問題になるような場面では対人関係をよくするため、つまり、丁寧さを出すために両者が使い分けられることがある。その使い分けとは、聞き手に義務を課することによって不利益を被るときに、義務を課することに話者が賛成していないことを伝えるためにmustではなくhave toを用いることである。

2.2 Palmer (1979, 1990)

*The Survey of English Usage*の資料から、Palmerはhave (got) toの意味をcircumstance compelあるいはexternal necessityと規定した[6.2.2]。have (got) toが用いられるのは、次の例のように主語に課せられる義務が、話し手にその義務の源があるのではなく、その場の状況など外部の要因による場合である。

(2.9) There's a whole lot of literature you've got to read. (S.3.3.75)

(2.10) Will you say to him that I can't come to a meeting next Wednesday because I have to go to a Cambridge examiners' meeting? (S.8.3g.3)

Mustでは、次の例のように話者が聞き手に義務を負わせる意味で用いられることがある。しかし、すべてのmustがこのようにはっきりと話者が関与しているとは限らない。つまり、純粋に義務的 (deontic) な意味で用いられる例は少ない。

(2.11) I've been telling Peter, as I've been telling several people, you know, 'You must get into permanent jobs', and I've been urging Peter to go back to school teaching or something, where he's very, very good. (S.3.2b.16)

Have (got) toとmustの違いについて、Palmerは、両者を入れ替えてもほとんど意味の変わらない文脈もあることから意味がほとんど重なりある領域があることを指摘している。次例のように同じような文脈でmustとhave got toが用いられているからである。

(2.12) I must have an immigrant's visa. Otherwise they're likely to kick me

out you see. (S.1.5.71)

(2.13) I've really got to know when completion date is likely. Otherwise I might find myself on the streets. (S.8.1a.9)

Palmerによれば、上の2例では、義務に関して主語 (= 話者) が関与していない。義務が生じるのは、義務を遂行しないとよくない結果になるためであり、主語あるいは話者はその義務の発生に関与していないという。しかし、これはPalmerがhave toとhave got toを意味的に区別していないことから生じた誤解である。Coates (1983) やWestney (1993) が明らかにしているように、mustとhave got toはどちらも主観的意味から客観的意味を表すことができ、意味的にはお互いに似ているために同じような文脈で用いられることがある。

次の文脈は一般的な指示を述べているもので話者の関与はないとしてPalmerがあげている例である。2.14の文はボートの取り扱い説明であり、4.5節で述べる文体の違いが関係していると思われる。対人関係に配慮する必要のない談話の中でmustが用いられている。2.15では、have toとhave got toの区別が看過されていることを考慮する必要がある。

(2.14) When this happens you will see the boat's speed fall off and you must pay off just a little. (W.10.2.60-3)

(2.15) It's on the end of that safety line. All you've got to do is haul in. (W.5.3.111)

このようにmustではかならずしも話者が関与していないとするPalmerの例は再考する必要があるけれども、一応、Palmerの主張をそのまま受け入れると、Palmerはmustとhave (got) toの違いを次のようにまとめている。

Must: deontic or neutral have (got) to: neutral or external

Palmerはまた、通常have (got) toが用いられる文脈である外的要因による必要性が明らかな場合は、mustは用いられないとも述べている。

丁寧さに関して、Palmerは、聞き手が利益を得るような場面でmustが用いられると丁寧な言い方になると指摘している [4.3]。

(2.16) Well, you must say what you want for a present. (S.2.10.25)

(2.17) Oh, you must come round and see it. (S. 2.7.50)

次の例のように、親切なもてなしを主人が客に受け入れるように要求するのは丁寧なことである [9.2.vi].

(2.18) You must have another drink.

丁寧さと must の用法に関して、Palmer の言及はごくわずかである。

2.3 Perkins (1983)

Perkins は、英語の法助動詞には、文脈 (context) から独立した核意味 (core meaning) があると仮定している。その核意味論についてはここでは詳しく述べる場所ではないので割愛する。Perkins は must と have (got) to の意味の違いについては、Larkin や Palmer と同じ見解を取っている。

Have (got) to は must と違って、話し手が義務の源になることはない。次の 2.19 では、上官が命令を発している場合で、話し手が義務の源であることを含意する。Have to を用いた 2.20 にはそのような含意はなく、義務の源が話者以外のところにある。また、have (got) to の表わす義務は、その文の主語が遂行する必要があるために生じたものではなく、主語以外の事情によって生じた義務である。

(2.19) You must be in camp by ten.

(2.20) You have to be in camp by ten. [Perkins (1983) 4.2 (Leech 1969:227f.)]
このような意味の違いが文脈によって無効になることがある。

(2.21) You must wear evening dress to the reception.

(2.22) You have to wear evening dress to the reception. (Perkins (1983):120)

2.21 のように、義務の源が話し手であることを表す must は、押し付けがましくあからさまな言い方なる。そのために丁寧さへの配慮から、話し手が義務の源である場合でも、must を用いないで、have (got) to が用いられることがある。2.22 では、have to は義務をもたらすのが話し手ではないことを示唆するからである。have to は話者以外のところに義務が存在し話し手の責任でないことを表す。このような丁寧さへの配慮が、両者の根本的意味の違いを不明瞭にしているのである。

2.4 ポライトネスとの関係

Larkin と Perkins の言う丁寧さとの関係は次のようにまとめることができる。must は義務の源が話者であること、あるいは話者がその義務の源に共感していることを表す。話し手が聞き手に義務を課する場合には、聞き手に負担になる場合は義務を課するのが話し手でないことを示唆するために have to が用いられる。

このような must を have to に変えるという手段は、face を脅かす行為をするのは話者ではないということを示すものであるとすると、ここで用いられているポライトネスの方略は、1.1 節で述べた “Impersonalize S(peaker) and H(earer)” であるといえる。しかし、この方略は通常、1 人称や 2 人称の使用を避けるという形で現れるが、must から have to への変更で生じる丁寧さは両者のもつ主観性と客観性という意味の違いから生じる効果である。また、have to は義務の源が話者以外のものであり、義務の存在を報告するものであるということ、その義務の内容が face の侵害になるものである場合、その義務の遂行は話者以外の要請によるものであることを含意する。話者以外からの要請とは社会の規則・慣例や他の権威などによることを示唆する。must を have to に変更することは “State the FTA as a general rule” というポライトネスの方略を利用していることにもなる。

Larkin, Palmer, Perkins の 3 者が共通して指摘していることは、聞き手に利益になる場合は must がそのまま用いられる。これは Leech (1983) が指摘した TACT MAXIM が遵守されている場合である。聞き手に利益になることを勧めるときに話者が積極的に関与していることを示すのが “you must...” なのである。但し、Larkin らがこの点に関して指摘しているのは、2.8 や 2.16-18 のような聞き手を招待するときや、飲食物を勧めるようなときに慣用的に用いられる “you must...” である。“you must...” の別の用法は 4.2 節でさらに扱う。

3. Coates (1983) の分析

3.1 漸次的推移性

Palmer (1979) などで、must と have to の根源的意味における違いは、話し手の関与の違いであることが明らかにされたが、Coates のコーパスによる研究でもこの

ことが確認されている。Mustでは常に義務の源である権威・権力が話し手にあるのに対して、have toでは義務の源に関しては一定せず、話し手は中立的である。但し、根源的意味のmustでは、漸次的推移性 (gradience) を示して、主観的意味から客観的意味を表す例や強い義務から弱い義務を示す例が見出される。それに対して、have toはすべての例において、“it is necessary for” という言い換えができる客観的法性を表す。

Coatesによれば、漸次的推移性を示す must の本質的意味は遂行的なものであるとして、次のような特徴を挙げている。

- (i) 主語は有生 (animate) である。
- (ii) 主動詞は行為動詞 (activity) である。
- (iii) 話し手は主語にその行為をさせることに関心がある。
- (iv) 話し手の方が主語よりも権力を持っている。

しかし、このような遂行的意味の must の例が実際に用いられるのはコーパスの中では14分の1にすぎない。mustには中心的意味がありながら、その意味で用いられる例が極端に少ないという矛盾した結果になっている。

Coatesの言う must の漸次的推移性というのは、次の3.1のように全くの主観性を示すものから3.2のように客観的な用例があることである。3.3のような客観的で義務の意味が非常に弱い例も非常にすくない。

- (3.1) “You must play this ten times over”, Miss Jarrova would say, pointing with relentless fingers to a jumble of crotchets and quavers. (Lanc 1-G 332)
- (3.2) ...we are machine gunners. I must have a ‘counter attack force... (S.1.14B. 3) [音調記号は省略する。以下同じ]
- (3.3) Clay pots... must have some protection from severe weather... (Lanc 1-403)

mustの義務の意味の相対的な強さに影響を与える媒介変数として、上にあげた mustの本質的意味の特徴以外に、Coatesは、「2人称主語」、「有生主語」、「無生主語」の変数を採用している。無生主語は3人称にあたるので、義務の強さは、主語の人称

と話し手の関与 (主観性) に左右される。3.1は2人称で、3.2は1人称、3.3は3人称である。義務の強さは、2人称主語の場合で遂行的に用いられたときに最も強くなる。しかも、最も強い意味で用いられる例は非常に少ない。

Coatesはなぜ2人称主語のときに義務の意味が最も強くなり、聞き手にとって失礼になるのかについては自明のことであると考えているために特に説明していない。この自明なこととして意識されていないことには英語文化の対人関係の捉え方がその背景にあるように思われる。2人称主語のときに義務の意味が最も強くなるのは、話し手が直接的に聞き手の face を侵害するからである。聞き手の意向を無視して話し手が一方的に義務を強要する言い方だからである。アングロ文化では、聞き手の自由意志・自律性を侵害しないことは非常に重要な文化的価値観である。この文化的価値を背景にすると2人称主語で must が用いられると聞き手の自由意志と自律性を侵害することになり、これがアングロ文化では対人関係に深刻な影響を与えるのである。

3.2 ポライトネスの方略と must の漸次的推移性

2人称主語を伴い遂行的に用いられて義務の意味が最も強くなる must の例が少ないことの理由として、丁寧さの問題があることを Coates は指摘している。人間が平等とされる社会では、遂行的な言い方は失礼になり、遂行的用法が許されるような誰もが認めるような権力構造が存在する場面は非常に限られているからである [Coates (1983): 4.1.1.4]。しかし、must の遂行的用法以外の例については丁寧さの観点からそれ以上の分析を行っていない。ポライトネスの視点から、Coates が義務の強さや主観と客観の中間的な例としているものをみると、Brown & Levinson (1978, 1987) が明らかにしたポライトネスの方略が関係していることが分かる。

Coates が中心的な例から外れるとしてあげているものに、次のような受動態の例がある。

- (3.4) “If you commit murder, Charlotte, you must be punished.” (Lanc 1-1851)
- (3.5) He’s going on the 7.40 tomorrow morning and everything must be packed tonight. (W. 8. 1.11)

Coates は、3.4の文について、「話し手は命令を下しているのではなくて、法律を述

べているにすぎない」と述べている。この文では、受動態であるために誰が罰を課する主体であるかが明示されておらず、また、罰せられるのは法律によるものであることを示唆している。この文の義務の意味が弱まるのはBrown & Levinsonが「消極的丁寧さ」(negative politeness)の8つめにあげている“State the FTA as a general rule”という方略と関係があると思われる。この方略はFTAsが社会的な規則であるということを明示することによって、FTAsのもたらす負荷が話し手や聞き手とは関係がなく、従って話し手は聞き手にnegative faceを侵害するつもりはないということを伝える方略である。義務を課するのが話し手ではなく法律であることによって、聞き手の自律性の侵害が個人の意思によるものではないということになり、そのために義務の強さが弱くなるように思われるのである。

3.5の文はBrown & Levinsonが消極的ポライトネスの7つめにあげている“Impersonalize S and H”という方略が用いられている。この方略は、話し手(S)が聞き手(H)のnegative faceを脅かしたくないという気持ちを表す方法で、FTAを行うときその行為は話し手以外のほかの人によって行われるように見せかけることや、FTAを行う対象が聞き手だけでないということを示すやり方がある。3.5の文を能動態にするとつぎの3.6のようになり、義務があるのは“he”であることになるが、受動態にすることによって、義務を誰に課するのかを明示することを避けている。そのために義務の強さは弱まり、丁寧さが増すと考えられる。

(3.6) ...he must pack everything tonight.

mustの主語にweを用いた場合には、自己勧告(self-exhortation)と擬似勧告の場合がある。このような勧告文をCoatesはさらに義務の意味が弱まる例としてあげている。

(3.7) anyway we must consider seriously the Prom programme (S. 1. 22A. 16)

[音調記号は略]

(3.8) we must remember that the peasantry in those days didn't live on wages alone. (T. 11. 2A. 12) [音調記号は略]

weが主語のときの2種類の勧告で注意しなければならないのは、聞き手にだけに関わることを、包括の(inclusive) weを用いて話し手にも関わるように述べる場合があ

ることである。これは積極的ポライトネスの方略(Positive politeness strategy)の1つで、包括のweを用いて、聞き手にだけ関わることを話し手にも関わるかのように思わせて、話し手と聞き手の距離を縮めようとする方略である。“we must...”の義務の意味が弱まるときにはこの方略が用いられている可能性がある。

Coatesの漸次的推移性は、mustのもつ話し手を志向する強い義務の意味をpoliteness strategyを用いて相手のfaceを脅かさないようにする緩和策の結果生じた効果であると捉えなおすことができる。義務が最も強くなる場合が、話し手が聞き手に義務を課するような状況であり、これは、誰からも邪魔されたくない、自由でありたいという聞き手の自律心を侵害する場合である。そのために、話し手は聞き手との対人的関係に配慮した方略を用いる結果、mustの義務の強さが弱くなる。

では、聞き手のfaceを侵害する恐れのあるmustをなぜ用いるのであろうか。mustは、Larkinが言うように、述べられている義務に話者が共感・同調していることも表す。mustを用いることによって話者の主観性を維持することは、自己主張と自律を重んずる英語話者には同様に重要なことである。単なる客観的な義務の報告や言明でなく、話者はそれに関わっているということをもmustは伝える。mustを取り巻く義務的用法は、話者と聞き手の自律性とお互いのfaceを保つ丁寧さの方略から説明できると考えられる。

4. Westney (1995) の分析

Westneyは*The Corpus of English Conversation*というイギリス英語のコーパスを用いて法助動詞とその迂言形(periphrastic forms)の詳細な分析を行っている。このコーパスは、Coates (1983)とPalmer (1990)が用いた*the Survey of English Usage*の一部をなすものである。Westneyは、mustの用法について義務と認識の2つの意味に分けて、それぞれについて、主語の人称ごとに分析を行っている。

4.1 義務的意味のmustと1人称主語

話者が聞き手に義務を課するという話し手に基づく(speaker-based)意味をもつmustは、主語が1人称の場合には、話者と主語が一致しているため、話者が義務を

自らに課するという意味を表す。しかし、コーパスではこのような例のほか、次のような慣用的表現で用いられる must が多く見出される。

- (4.1) I must admit that the book-club offered to buy us a special pre-Christmas gift. (CEC:686/1-3) [*例は Westney (1995) が提示しているものである。以下同じ]

このような I must say/admit 型の例では義務の意味はなく、談話的機能を果たしているものであるとして Westney はさらに分析は行っていない。次節では、I must say/admit 型の発話について検討する。

4.1.1 I must say / admit...の機能

義務の強さや主観と客観の中間的な意味で用いられるのは主語が1人称の場合である。中間の意味の中でもっとも頻度が多い用法は、I must say/admit/confessなどで、1人称と限られた動詞と共に用いられる場合である。これについて、Coatesは「奇妙なことに話し手が自分に強制していることがらを自分で実行していることである」と述べるに止まっている。Palmer (1990) でも must のこの用法は I must admit = I do admit のように強意になるという談話的機能を果たすとししか述べられていない。Westney も、義務の意味を表すのではなく談話的機能を果たすものであるとして特に分析は行っていない。

I must say / admit / confess...という表現は、“I+遂行動詞(現在形)”と似たような遂行行為の機能を果たし、mustの後に用いられる動詞は遂行動詞である。Fraser (1975) は遂行動詞の前に、must, can, mayなどの法助動詞やhave to, able to, intend toなどの迂言形、さらには、wish to, want toなどを伴う発話を hedged performatives と呼んでいる。遂行動詞に法助動詞が伴う発話の中で、あるものがどうして強い遂行性を示すのかということを明らかにするために、Fraserはある種の会話の原理を提案しているが、その会話の原理については本節の目的ではないのでとくに取りあげない。

Fraserは“I must+遂行動詞”は責任回避の手段であると考えている。mustが用いられると文の主語に課された義務を実行せざるえない気持ち (a sense of

helplessness) を含意する。例えば、Johnnyの母親が次の文をJohnnyの友達に対して述べた場合には有無を言わせない強制力がある。

- (4.2) Johnny must go inside now to eat dinner.

したがって、mustの後に遂行動詞がつづき、伝える内容が聞き手にとって好ましい結果をもたらさない場合には特に話し手は一種の責任回避の手段として must を用いる。

- (4.3) I must conclude that you are not interested.

4.3の文では、聞き手の意見と対立することをどうしても結論として言わなければならないという義務を言明すると同時に話者がそうせざるをえないのは話し手(=私)だけの責任でないということを伝えている。must+遂行動詞が責任の回避を示唆しているときに遂行性が強くなる。遂行性が強くなるのは話し手が行う発話内行為が聞き手のにとって好ましくない場合である。

Fraserの言う遂行性の強弱は、Leechの丁寧さの原理と関係付けることができる。次の例はFraserが責任回避の意味が伴わないので弱い遂行性を示すものとしてあげている例である。promise, offer, volunteer, grantという行為が発話と同時に行われているというよりも、そういう行為をする義務があると述べているだけである。

- (4.4) I must promise you that I will marry you tomorrow.

- (4.5) I must offer to help you out of that ditch.

- (4.6) I must volunteer to assist your committee.

- (4.7) I must grant you my entire fortune.

これらの例では、話し手は聞き手が利益を受けるような行為あるいは少なくとも損益について中立的な行為を自らに義務づけている。聞き手の利益になることを話者が行うことは親切な振る舞いになる。そのために、これらの文では丁寧さが増す。話者(=主語)が課せられている行為は実行されなくても話者や聞き手に不利なことになるわけではなく、それだけ話者は自らに課した義務を遂行する切迫感というものはない。

それに対して、Fraserがあげる次の例から明らかなように、遂行性が強い場合は、遂行動詞が権威を行使したり人を拘束したりする意味を表し、義務付ける内容は聞き手にとって好ましくないものである。聞き手にとって不利益になることや聞き手の

自由の拘束することを伝えなければならない。そのような場合に話者はそうしたくてしているのではないということを示すために、一種の責任回避をする手段として must を用いるという訳である。ここでもアングロ文化の重要な対人関係の価値観が現れている。

(4.8) I must refuse to carry out that request.

(4.9) I must assure you that you will be severely punished.

(4.10) I must deny you access to that building.

(4.11) I must cancel your promotion.

(4.12) I must restrict your movements to the immediate vicinity.

Bach and Harnish (1979:10.2.2) では must に遂行動詞が伴うのは躊躇していること (reluctance) を表すと考えている。

(4.13) I must ask you to leave.

(4.14) I must confess that I forgot your name.

4.13の文では依頼することが義務なので仕方がないことだということで責任回避の表しているとも考えられるが、4.14の文では、責任回避ではなく、自ら責任を認めていることになる。このような例もあることから、“I must+遂行動詞”は、話者が遂行動詞の表す行為をためらっていることを含意すると Bach and Harnish は述べている。一般的に人が実行するのをためらうような行為である場合に話者は must を用いてそのためらいを示唆しているのである。

Leech (1983:6.2) は、次の例のように警告をする場合、“I must+遂行動詞”は遂行動詞だけが用いられているときよりも間接的であるためにポライトネスに配慮した発話であると述べている。話者は“I warn you...”という遂行発話で直接的に警告をしているのではなく、警告をする義務があることを述べているだけである。この発話が丁寧になることには、Bach and Harnish が述べているように、話者の躊躇している気持ちが現れているからであろう。

(4.15) I must warn you not to discuss this in public.

しかし、Leech はまた I must が次の例のように明らかにポライトネスを表す発話にも用いられることに言及している。

(4.16) I must tell you how much I admire you...

この例では、発話行為の好ましきや必然性が強調されている。聞き手にとって好ましいことを述べる場合は強意になる。このような発話では must がためらいを示唆するとはいえない。Bach and Harnish は、“I must+遂行動詞”が聞き手にとって好ましいことでない場合のみに注目してこの構文の一面しか捉えていないことになる。

小野 (1993:302) では、この must の意味上の機能は「遂行動詞で表す発話行為を遂行することに対する話者の心情を表現することである」と述べている。「(なんらかの事情で) 心ならずも／やむを得ず (言わなければならない)」という話者の心情を伝えるものである。話者の心情を伝えるということは、must はまさに話者の主観性を伴うことでもある。

Wierzbicka (2003:7.1) は、次の a を意味するのに b の文を用いるのは不適切になると述べている。

(4.17) a. This must be the milkman.

b. ?I must say, this is the milkman.

I must say の後に事実であると確信できない内容が続くからである。I must say の後に続く内容は、話者の確信ある判断内容であり、その判断に至るまでの話者個人の思索がある。I must say という表現にはそれをあえて表明するという自己主張の要素がある。それを Wierzbicka は次のようなスクリプトで表す。

(4.18)

I must say, she is very beautiful.

I say: she is very beautiful

I don't say it because I want to say it

I must say it if I want to say what I think

I say it because I want to say what I think

このスクリプトの最後の2行は思索したことを表明したい場合にはそれを言わなければならないということを表している。

以上の先行研究から言えることは、I must の後の遂行動詞によって行われる発話内行為を主張 (asserting) とそれ以外の発話内行為の2つに少なくとも分けて考え

なければならないということである。主張以外の場合、I must のあとに続く遂行動詞によって行われる行為が、聞き手にとって利益になるとき、あるいは少なくとも損益について中立であるとき、その遂行性は弱くなる。聞き手にとって利益となる場合は丁寧な申し出となる。聞き手に不利益や負担をもたらすときは、“I must + 遂行動詞” は、must を用いない直接的発話行為よりも間接的になり丁寧な言い方になる。話者は聞き手に不利益なことをすることになるので、must の使用は話者が躊躇していることを含意する。

主張 (asserting) の場合には主張する内容を話し手と聞き手にとって好ましい内容と好ましくない内容に分けて考える必要がある。聞き手にとって好ましい内容の場合には“I must...”にはその内容を強調しようとする話者の気持ちが表される。好ましくない内容の場合には発話行為の間接性が増し丁寧な言い方となる。そのような発話には話者が責任回避しようとしていることや躊躇しているという話者の気持ちが表される。admit や confess のような遂行動詞では話者自身にとって好ましくない内容を伝える場合もある。その場合も話者が躊躇していることを表すが、それと同時にそれをあえて言明することに話者の誠実さを伝える機能もあるように思われる。話者と聴者にとって好ましい内容であってもなくても根本的に“I must + 主張の遂行動詞…”には話者の思索の内容についてそれを表明したいという自己主張の要素がある。

使用頻度が多く慣用的に用いられる I must say/admit/confess... では、話し手や聞き手にとって好ましくないことを述べるときでも好ましいことを述べるときでも、話者がそれらを積極的に言明せざるをえないという気持ちを表す。自分の見解を言明するというのはアングロ文化の重要な価値観である。聞き手へのポライトネスに配慮しつつ、話者個人の判断とその表明を行わなければならないという思いが込められている。そういう意味でこの慣用的な表現はアングロ文化の価値観を反映したものである。

具体的な例を見てみよう。次の 4.19 は、あるアメリカ人女性が筆者に送ってきたメールの一部である。inform は主張の遂行動詞であり、伝えなければならないのは読み手にとって好ましくない内容である。

(4.19) Regrettably, I must inform you that after much deliberation, I have

finally come to the conclusion that I cannot accept 3 classes with about 40 students.

この文の後には、その結論に至った理由が切々と述べられている。相手に好ましくない内容を知らせなければならないのは、書き手自身の問題ではなく、4.19 の文の後に述べられている理由が正当なものであり、その自然な結果として至った結論であるということを伝えようとしている。好ましくない内容を伝えなければならないのは書き手だけの責任ではないという一種の責任回避というよりも、この文では熟慮の末の確固たる決意が述べられており、自分の出した結論は正当なもので自信をもって表明すべきものであるという書き手の心情が表れているように思われる。書き手が表明する内容が読み手にとってよくないものであるために、書き手の気持ちは regrettably で表され、本来、これから述べることは書き手の望むことではないということを表明している。そういった意味では must を用いることによって書き手が躊躇していると言えなくもない。しかし、躊躇というよりも、自分の望むことではないが、あえて自分の至った判断に自信がありそれは確信をもって主張すべきものであるという意味あいの方が強いように思われる。

このような I must say/admit... の表現には、話者や書き手が自らの判断をしたという個人の自律性という要素と、その判断内容は表明すべきものであるという自己主張という要素があり、アングロ文化の価値観を明瞭に表すものである。そのため英語話者には好んで用いられて慣用的になったものである。慣用的であるために義務の意味が非常に弱いと考えられる。must の意味を「義務の強弱」という観点から捉えたと弱化したとしか言えない。しかし、「話者が聞き手に課す主観的義務」という must の持つ意味が、1 人称主語、“I must...” では自らが主体的に選び取った義務であることを示すことができ、このような意味をもつ “I must say/admit...” がアングロ文化の価値観の中で、語用論的にどのように用いられてきたかをこれらの慣用的表現は如実に表している。

4.1.2 決意の must

Westney は次の例を義務の由来があいまいで明確でない場合の例としている。

(4.20) It is impossible for me to make an exclusive choice among the various activities. What seems right for me at any given moment is what I must do. (L. Bernstein, quoted in *Newsweek*, 5.9.1988:50)

(4.21) This is the road I am resolved to follow. This is the path I must go. (M. Thatcher, quoted in *The Sunday Times*, 29.3.1981:14)

上の例では芸術家の芸術的動機づけや政治家の決意や使命感に言及している。芸術的動機や使命感は、個人の内面から湧き出てくるものである。動機や使命感が個人の内面にどうして生じたかということは明確なものになるとは限らない。そういう意味では、Westneyの言うように義務の由来が曖昧であるとも考えられる。しかし、結果として、話し手の内面から生まれた義務であることは確実である。したがって、上の4.20-21の文でのmustの使用は、主語に当たる人物の強い主観性と主体性を表していると考えてよいものであり、mustが義務の由来が話者であるという例に反するものでないであろう。

Palmer (1990) は、次の4.22-23は同じような文脈でmustとhave (got) toが用いられているためにmustが話者(主語)の義務に関与していない例としている。義務が生じるのは、義務を遂行しないとよくない結果になるためであり、主語あるいは話者はその義務の発生に関与していないというわけである。

(4.22) I must have an immigrant's visa. Otherwise they're likely to kick me out you see. (S.1.5.71)

(4.23) I've really got to know when completion date is likely. Otherwise I might find myself on the streets. (S.8.1a.9)

確かに、4.22の文では義務の源は話者ではない。しかし、義務を遂行しないと不利益を被ることからその義務は外からの義務であったとしても、自らその義務を引き受けるという話者の主体性が伺える。I must...は義務の源が話者である場合にだけ用いられるのではなく、外的な義務を自らの義務と捉えなおしてそれを表明するときにも用いられる場合がある。“I must...”は、外部からの押し付けられた義務であったとしても話者自らが選びとったものであるということを伝えるのであり、これはアングロ文化の個人の自律性を重んじる価値観と一致する。話者の内面から生まれた義

務や話者自らが選びとった義務を表す“I must...”は決意を表す。

次の例は、Westneyが義務の由来があいまいな例としてあげているものであるが、一般的にI must be goingの形をとり、丁寧な慣用的表現である。

(4.24) a (offers sherry)

A well, a very little, because I really must be getting home in a moment (CEC:651 / 134-139)

“I must go”という表現が丁寧になるのは、おそらく、話し手が自らに課した義務であり、話者の主体的決意が表明されているからであろう。話者が別れを告げなければならぬというときの話者の意思を聞き手は尊重しなければならない。相手の意思を尊重するということはアングロ文化の重要な要素でもある。

4.2 義務的意味のmustと2人称主語

Westneyの研究でも、遂行的意味を表すmustの用法が、話し言葉のコーパスで極めてまれであることが再度確認されている[4.4.2.1]。これはCoates (1983:45)でも述べられているように、遂行的なmustが用いられるのは当事者の社会的関係が平等ではなく、話し手が聞き手に一方的に義務を明示しても聞き手はそれに従うことが期待されている場合にのみ限られるからである。さらに、Westney自身は義務の源・由来が話者かどうかという点に目を向けているために気づいていないようであるが、2人称主語と共にmustが用いられるときには聞き手に配慮した内容になっているということである。

Palmer (1990) が、話し手が義務を課している場合であるとしている次の例も義務を述べているのではなく、Peterの望ましい方向を示して説得しているのであるとWestneyは述べている。そのことはurgeという動詞が用いられているからも分かる。

(4.25) I've been telling Peter, as I've been telling several people, you know, 'You must get into permanent jobs', and I've been urging Peter to go back to school teaching or something, where he's very, very good. (S. 3.2b.16)

Westneyが示す次の例では、2人称主語とmustが用いられた場合は、話し手の関

与が顕著なときでも義務を聞き手に押し付けるようなものではなく、聞き手に忠告を与える程度のものである。

(4.26) I can only say that you must take, you must take Joe Power's advice on this (CEC:386/643)

頼みもしない忠告や助言はアングロ文化のような個人の自律性を重んじる文化ではあまり好まれないものである。mustを用いて話者が忠告を押し付けることは、自由でありたいという聞き手のfaceを侵害するものであろう。しかし、忠告の内容が、話者の恣意的な判断からではなく、聞き手の利益や幸福を願う場合にはmustの押し付けがましさは相殺される。次の例は、Seidensticker訳の「雪国」(川端康成著)からの例である。忠告の内容は聞き手の無事を気にかけているものである。

(4.27) "I had a little accident. I've been going to the doctor."

"You must be more careful."

次の例では、4.28では、"I suppose"という表現があることから話者が一方的に義務を押し付けるものではない。4.29でも、"that's fair enough"という文があるので義務がそれほど強いものではないことを示している。これらの例では、話し手は聞き手に共感したり感情移入したりして、聞き手の立場に立って聞き手がすべきことを述べている。

(4.28) and then, you, you must do that, I suppose, with standardization (CEC: 553/450-452)

(4.29) B I can't do with an aura of failure, I have enough failure coming from my own depths, you know

A yes, you must consider that, that's fair enough

次の例では、話し手は聞き手の視点から必要なことはどうすることであるのか認定している。

(4.30) ... well, if you apply that criterion, then surely you must start to rearrange your estimates of Lawrence's novels, surely.

聞き手の前言を受けて、"if you apply that criterion"と述べており、聞き手の視点に立っていることを示している。聞き手の視点から話者は聞き手がしなければならない

ことを伝えている。

4.28-30の例から、義務を果たさなければならない聞き手の立場に話し手が感情移入している場合や、聞き手の視点を取っている場合にも、mustが2人称主語と用いられることが分かる。このことからWestneyは義務の源は話し手でないということを強調しようとしている。

聞き手の視点に関して言えば、Palmer (1986:3.2.3) があげる4.31の文にも同じことがあてはまる。Palmerは義務的意味のmustには話し手の関与に関して様々な程度の差があることを次の例で示している。4.31aでは、話し手が聞き手に義務を押し付けていると解釈できるが、bの文脈では話し手が義務を課しているのではない。

(4.31) a. You must come here at once.

b. You must go now if you wish to catch the bus.

bの例では話し手の関与がないのはmust自体の意味に関わるのではなく、この文が「あなたがバスに乗りたいのなら」という聞き手の立場から述べられているものであり、聞き手に課せられる義務は聞き手にとって都合のよいものになるからである。

4.28-31の例から明らかなように、"you must..."が用いられる場合、話者が聞き手の立場から聞き手の義務を述べていることになり、話し手が義務を聞き手に押し付けるものではない。これは聞き手への対人関係の配慮がなされている場合である。mustのもつ話者指向の意味は、さらに、聞き手にとってそうすることがよいという話し手の主観的判断も伝える。このように、mustが2人称と共に用いられるとき、聞き手への対人関係の配慮がなされており、聞き手の側に立った話し手の主観的判断がある。

義務の内容があきらかに聞き手に利益がもたらされる場合もmustが2人称主語と用いられる。これにLeech (1983) のいう丁寧さの原理が関係している場合ですでに1.2節、2.2節、2.4節で述べた。

"you must..."が用いられるのは、聞き手の利益のために忠告をする場合、聞き手に共感しているか、聞き手の視点から義務を述べる場合、話し手の課する義務を実行すること自体が聞き手に利益をもたらす場合である。すべて、ポライトネスの観点から聞き手へ配慮がなされている場合である。

4.3 義務的意味のmustと3人称主語

Westneyは、第1節でも言及したLarkin (1976:392) の次のような主張から、mustが表す義務の源は話し手であると誤解しているために、mustは話し手指向の義務を表すという見解に否定的である。

(4.32) implies that the speaker “goes along with” the prohibition that the sentence states, while (4.33) is neutral in this regard.

(4.32) My girl must be home by ten.

(4.33) My girl has to be home by ten.

しかし、Larkinはここでは(4.32)の義務の源・由来が話者であるとは述べていないのは明らかである。Larkinが述べているのは、(4.32)で示された義務の源が何であったとしても話し手はその義務に賛意を示している、あるいはその規則に従うのは当然だと思っている (goes along with) ということである。

Westneyがmustの義務の源は話者でないという判断を下すのに示しているデータは次の3つである。

(4.34) A oh, have you? I haven't even seen it really, to speak of
b where it's got to
A and it must be, that must be one thing we do (CEC:651-652/139-143)

(4.35) B you could study literature in a foreign language, couldn't you?

A yes, I could

B you feel it, it must be English

A yes (CEC:776/1107-1112)

(4.36) ah, Vienna is a Congress stadt, and it must become, a, known as a place friendly to the handicapped. (CEC:738/326-330)

4.34の例の前には次のようなやり取りがある。

(4.37) A anyway, we must consider seriously the Prom programme
b oh yes, I have considered it seriously (CEC:651:/134-139)

4.34の例ではAの2つ目の発言は“... that is one thing we must do.”と言い換え

てもほぼ同意である。この発言は、話者と聞き手を含めた包括的weを主語に用いていることから自己勧告の文になる。実際にはこのような自己勧告文にしていないのは、その前の会話のやり取りで“we must consider...”という発言に聞き手は“I have considered it...”という返答が返ってきたために、“we must do...”を繰り返すのをためらっているためである。義務をもつ者が話し手と聞き手であるのにそうでないような言い方をしていると考えられるので、ここでは“Impersonalize S and H”というnegative politenessの方略が用いられている。

4.35の発言では、“you feel”の補文になっていることから聞き手の立場からの発言であり、話し手が義務を押し付けているのではない。

4.36の例では、義務の由来は本来Viennaの状況であり、客観的なものである。話し手はその客観的状況を踏まえた上で、障害者に優しい場所として知られるべきであると主体的に判断している。Westneyはこの例は認識的意味に近いと述べているが、その理由は、Viennaの客観的状況を踏まえた上での話し手の判断が含意されるからである。4.36の例のように、主語が3人称で無生物の場合は、義務の源は話者ではなく、主語の持つ特質が要因となって生じる必要を表す。主語の特徴から生じる必要性は、動的 (dynamic) 意味である。“3人称+must”によって伝えられる必要性の源は話者ではなく、主語の持つ特性から生じる必要性である場合が多いと言える。主観性を持つmustは話者がその必要性に賛意を表していることを伝えるが、直接的に聞き手に関わることではない。3人称無生物の主語で動词的用法のmustでは、対人関係の配慮をする必要がない。

mustが3人称主語と共に用いられるときには、次の2つの場合がある。1つは、ポライトネスの方略が用いられて主語が3人称になる場合である。もう1つの場合は、動詞の意味のときで、主語の特性から生じる必然性や必要性を意味するので、聞き手への丁寧さの配慮をする必要がない場合である。

4.4 義務的意味のhave to

Westneyによるコーパスの調査では、have toと1人称主語のどの例もhave toは外的な義務の存在 (the existence of some externally identifiable source of obligation)

を示唆するものである。

(4.38) I then went on to say, well, if you say this is not so, then I have to accept that it isn't so, this is just what I think at the moment, and I kept stressing, you know, I'm not offering you knowledge. (CEC:89/357-365)

必要性の存在 (the existence of the necessity) に焦点をあてた意味を表すので、have toが示す義務や必要は、特定のなものというよりは、一般的・習慣的な義務を指す。

次のようなI must say型の例がhave toにもあるが、mustの場合ほど多くはない。

(4.39) It was a classic piece of investigative reporting... I have to say I didn't understand what all the fuss was about. Ever since I came to Fleet Street I have been called slitty-eyed and names like Kowloon Lucy... (*The Observer*, 14.6.1992:59)

Westneyの調査では、have toと2・3人称主語の場合も、次の例のように話し手が関与しない状況的必要性(circumstantial necessity)を表す。

(4.40) how many hours do you have to do? (CEC:238/1015-1017)

(4.41) some of our people who are doing LEs have to consider which paper to do (CEC:34/39-41)

話し手とは関係のない外的な義務が存在することを示唆するので、言及されている義務や必要性は一般的で原則的なものを指すのが多く、特定の状況での義務や必要性を含意しない。しかし、このことは主語が2人称のとき話者が義務を聞き手に押し付ける場合に、義務の由来が話者とは別に存在することを示唆するのにmustの代わりにhave toを用いることもあることを否定するものではない。Westneyがあげる次の例がその好例である。mustが用いられると話者が聞き手に認めるように強要していることになるが、have toを用いることによって認めざるをえないような状況が存在しているという意味を伝えることができる。この“you have to admit...”は“I want/expect you to admit...”という意味を表すとWestneyは述べている。

(4.42) “You have to admit,” said Jack, “that he was the most remarkable

person we ever met.” (Murdoch 1990:4)

また、Westneyの調査ではCECのコーパスにはhave toが遂行的に用いられている例はない。

have (got) toは通常、話し言葉で用いられる。それに対して、mustが3人称主語で用いられるのは主に書き言葉の場合が多い。書き言葉では聞き手への配慮はそれほど必要でないように考えられる。文体の違いについては次節で述べる。

4.5 文体の違いとボライトネス

mustは形式ばった書き言葉 (formal written style) でも用いられるのに対して、have toは口語的で形式ばらない文体でもおもに用いられる。そのために、意味の観点からhave toが適切な場合でも、形式ばった文体ではmustが用いられることがあるとWestneyは述べている。特に、公的な書き言葉の文体 (public written style) やジャーナリズムの英語ではmustを用いる。次の例では義務や必要性の源は書き手の意思ではない。義務の内容に書き手が共感するような内容でもないと思われる。義務の存在を述べているだけであり、形式ばらないスタイルではhave toが用いられる場合である。このような文体の違いが両者の用法の区別を不明瞭なものにしている。

(4.43) The ceiling is so dark that 30,000 watts of electric light must be used for it to be photographed. (*The Economist*, 26.12.1987:117)

(4.44) He still must spend most of his time opening new factories. (*Newsweek*, 7.3.1988:13)

(4.45) Euro Disney must attract 11 million visitors a year to the Magic Kingdom to break even. (*The Observer*, 1.3.1992:32)

文体による違いをボライトネスの観点から捉えなおすとどうなるであろうか。mustを聞き手に向かって用いるときには対人関係への配慮が必要となる。しかし、上のようなジャーナリズムの英語では、書き手は、主語は3人称を用いて、客観的に第三者の義務について述べている。読み手へのfaceの侵害や自律性への侵害はほとんど感じられない。つまり、mustは読み手に義務を課するような内容ではないために対人的配慮が必要ないと思われる。

Leech (1983) は、話者と聞き手が相互に友好的人間関係を構築し維持するという社交上の目的 (the social goal) のために、どのようなポライトネスがどの程度必要であるかによって、発話機能を次の4つに分類している。

- (a) COMPETITIVE: The illocutionary goal competes with the social goal; *eg* ordering, asking, demanding, begging.
- (b) CONVIVIAL: The illocutionary goal coincides with the social goal; *eg* offering, inviting, greeting, thanking, congratulating
- (c) COLLABORATIVE: The illocutionary goal is indifferent to the social goal; *eg* asserting, reporting, announcing, instructing.
- (d) CONFLICTIVE: The illocutionary goal conflicts with the social goal; *eg* threatening, accusing, cursing, reprimanding.

最初の (a) と (b) の発話行為が丁寧さと関係がある。(a) では発話の目的が聞き手に対するポライトネスと本質的に競合する。聞き手への失礼な行為を緩和するために negative politeness が必要とされる発話である。(b) の発話行為自体は本質的に丁寧さを伴うものであり、積極的に行うことが奨励される。これには positive politeness の方略が用いられる。(c) の COLLABORATIVE では丁寧さとは関係がなく、丁寧さを配慮する必要のない発話である。Leech はこの種の発話に相当するのは殆どの書き言葉の談話 (written discourse) であると述べている。(d) は、丁寧さに配慮することが本質的にあり得ない発話行為である。

話者が聞き手に義務を課すかその義務に共感していることを表す must が、競合的 (COMPETITIVE) な発話で用いられて、義務の内容が聞き手に負担となる場合はポライトネスに配慮する必要がある。それに対して、主張・報告・表明などを表す書き言葉はポライトネスに配慮することが求められる談話である。ジャーナリズムなどの書き言葉の英語で must が用いられるのは聞き手 (読み手) への対人関係の配慮とは無関係の談話であるからだと考えられる。もしこれが正しいとすると、must と have to の用法の文体上の違いは対人関係への配慮の違いという要因もあるということになる。have to は口語的であるために形式ばった文語では文体上の理由から用いることが不適切であるという理由と、そのような文語ではポライトネスの配慮が必要ないと

いう2つの要因によって、文語では must が用いられると考えられる。

5. 考察

5.1 丁寧な have to

これまで述べてきたことから、must と have to の意味や用法の分析には対人関係に配慮したポライトネスの観点が必要であることは明らかであろう。must は話者が関与する義務を表すのに対して、have to は外的に存在する義務を表す。must の持つ「話者が関与する義務」とは、義務を課するのが話者の権威によることもあれば、話者が聞き手に課される義務に共感あるいは賛意を持っていることを表すことである。聞き手に義務を与える場合に、その義務に対する話者の態度が聞き手に伝わる。そういう意味で must はまさに法的 (modal) な助動詞である。それに対して have to が用いられる発話は聞き手に義務が存在することを伝える。その義務に対する話者の態度は中立的で、その義務に共感しているという態度は聞き手には伝わらない。このような両者の意味の違いが対人関係を良好なものにしようとする談話の中で、本来なら must が用いられるような場面で話者の聞き手への丁寧さに対する配慮から have to が用いられることがある。Larkin (1976) は早い時期からこのことを指摘して Perkins (1983) も同様の見解を述べている。丁寧さへの配慮から must の代わりに have to が用いられるとすると実際の談話の中では両者の意味や用法の区別はいまいきなものとなる。話者の関与が明らかな場合に、話者が関与していることをあからさまに出さないようにするために have to が用いられると、話者が関与している義務のときに have to が用いられることになる。さらに、このような have to は must よりも義務の意味が弱いと判断されることになる。実際の談話の中に現れた両者の意味や用法の分析には、その談話の中で話者がポライトネスへの配慮をどのように行っているかという観点が不可欠なものになる。

5.2 “you must...” と自律性

義務に関して話者が関与していることを表す must はポライトネスへの配慮を必要とする助動詞であるが、このことの背後には英語を母語とする人々の文化的価値観

がある。会話の中で話し手が聞き手に義務を課することを伝える“you must do X...”という表現が遂行的に用いられる場合は、発話と同時に話者が権威をもって聞き手に義務を与えることを意味する。Coates (1983) は、主観的で義務の意味が最も強くなるのは、主語が2人称で遂行的に用いられた場合であるとしている。2人称主語で遂行的に用いられたときになぜ義務の意味が強くなるのか。その背後にはアングロ文化の人間観がある。個人の平等が前提とされる社会では、一人の人間は独立した個人であり自力で物事を判断して行動することが求められる。言葉によるコミュニケーションにおいても、話者と聞き手の自律性を意識した表現をすることが意思伝達の基本的なあり方になっている。特に、聞き手に依頼をする場合は、相手の意思を重んじるような表現を用いる。Will/Would you...? や Can/Could you...? のように、慣用的な依頼の仕方が、依頼を引き受けるかどうかは最終的には聞き手にゆだねられた疑問文の形になるのがこの典型的な例である。慣用的な言語表現にはその言語話者の文化的な価値観が反映されている。個人の自律性を重んじる文化的価値を背景にすると“you must do X”という発話によって、話者の権威によって聞き手に有無を言わずに義務を課することは、話し手が聞き手の自律心を著しく侵害することになり、それはアングロ文化の価値観に反する。mustの遂行的用法で義務の意味が最も強く感じられ、失礼な言い方になるのは話し手が自らこの文化的価値に反する行為を行うことを含意するからである。

Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論もこのようなアングロ文化の価値観を背景にしていることを考慮しなければならない。彼らの理論は普遍性を謳いながらも、普遍的ではないという批判が起きるのもポライトネスをアングロ文化の価値観の中で分析しているためである。Brown & Levinsonがfaceの1つとして挙げているnegative faceは聞き手の自由でありたいという欲求、他者から邪魔されたくないという欲求を表しており、個人の自律性の重んじる文化的価値が表れている。英語ではnegative politenessの方略がよく用いられる。その理由は、聞き手のnegative faceへの直接的な侵害は、個人の自律性への侵害ともなるからである。遂行的に用いられるmustが、非常に失礼な言い方になるのは、聞き手のnegative faceへの侵害であると同時に個人の自律性への侵害でもあるからだと思われる。このような侵害を

しないように、対人関係の配慮から“you must do X...”という表現を英語話者は避ける。実際に、コーパスでは、遂行的に用いられる例が非常に少ない。Coates (1983) の調査では、遂行的に用いられる例は全体の14分の1である。

5.3 “you must...”と話者の主観性

Westney (1995) は2人称主語の“you must...”の場合に、遂行的意味ではなく、義務の意味が非常に弱くなる例がコーパスの中に多くあることを示している[4.2節を参照]。そのような場合は、話者が聞き手に義務を課するのではなく、話し手が聞き手の立場に立って聞き手の義務に共感している場合である。そのような場合の義務の内容は聞き手の負担になるものではなく、義務が遂行されたならば聞き手にとって有益なものになると話者が判断したことである。つまり、そのような発話行為は聞き手に対する忠告や重要な勧告を行うことになる。コーパスの用例から見れば“you must do X...”は相手に忠告をするときや注意を促すときによく用いられる。このことは、例えば、コーパス研究から生まれたSinclair (1990) では、mustは“making suggestions”や“indicating importance”のときに用いられると述べていることから明らかである。指示を与える(giving instructions)ときに用いられるのはmustではなく、willかshallである。

聞き手にとって有益なことを勧めることは丁寧さのTactの原理が適用されている場合で丁寧さが増す表現となり多用される。さらには、勧誘や招待するときの“you must...”は寛大さ(GENEROSITY)の原理が加わり、丁寧さがさらに多くなり、慣用的に用いられる。次のような例である。

(5.1) You must come and stay with us in London sometime. (Longman Exam Dictionary: *must*)

話し手の主観性を表すmustによって、聞き手の利益のため勧めることに話し手が積極的に関与していることを伝えることができる。have toではそのような話し手の関与は伝わらない。これが、聞き手の利益のためになされる発話では話者が積極的にかかわっていることを示すmustが用いられる理由である。

5.4 用例の不在とコーパス

コーパスで、話者が聞き手に義務を課するような遂行的な例が少なく、それとは反対に、聞き手の利益となる例が多く、その場合には話者が聞き手に義務を押し付ける意味は非常に弱い。コーパスのデータだけを見ているとmustの意味は「強い義務」ではないということも可能である。話し手が聞き手に一方的に義務を押し付ける遂行的用法は個人の自律性を著しく侵害するために、社会的力関係が明白な場合に用いられることを除けばmustの使用はまれである。まれであるのは、聞き手の自律性に対する配慮が言語使用の背景にあるからである。個人の自律性を重んずる社会で遂行的用法が非常に少ないということ自体が、mustには「話者の主観的な強い義務」という意味が内在していることを示しているといえる。強い義務を示す用例がコーパスの中に非常に少ないので、mustは「強い義務を必ずしも意味しない」と単純に結論を下してはならないといえる。対人関係への配慮からそのような用例が少ないのであって、遂行的用例の不在が逆にmustの意味―遂行的に用いられた場合、聞き手のfaceを大きく侵害するような意味―を明確に示しているのである。mustの状況は命令文の状況とよく似ている。命令文は失礼になるので実際はあまり用いられない。命令文がよく用いられるのは聞き手にとって命令の内容が利益をもたらす場合が多いからと言って、命令文は聞き手に負担を与えるものではなく失礼なものでもない結論づけることはできない。

mustは、話者が聞き手に強い義務を課するという意味が丁寧さの観点からまれであるということは、コーパス研究の弱点と限界を示しているといえるであろう。コーパスのデータに現れないものについては何も判断ができないためである。なぜデータに表れないのかという点を考慮する機会が与えられないのである。

5.5 動的用法とポライトネス

3.2節では、mustの示す漸次的推移性がポライトネスの観点から説明できる可能性を示唆した。Coates (1983) が義務の意味が最も弱くなり、話し手の関与がもっとも少ない例としてあげているのは次の5.2 (ここで便宜上5.2として再掲する) で、これは動的用法に近いと解釈できる。主語の特徴から生じる必要性をmustが表してい

るからである。

(5.2) Clay pots ... must have some protection from severe weather... (Lanc 1-403)

動的用法のmustで、主語が無生物で聞き手と直接関係がない場合は、義務の意味が最も弱いので聞き手への丁寧さの配慮が必要ないと言える。このような主語の特徴を利用して、話者は、本来、遂行的用法になり、聞き手の自律性を阻害するような言い方を避けるときに主語をyouではなく、3人称無生物主語にすることがある。次の例は小野 (1993) が動的用法としてあげている例である。この文ではitが何を指すかわからないがitの指すものによっては動的解釈も可能かもしれない。

(5.3) It must be sent to her. (p.306)

しかし、sentの動作主が誰であるによって、次のような能動文が考えられる。

(5.4) a. You must send it to her. b. He must send it to her. c. We must send it to her.

aのようにyouが動作主だとすると、動的解釈よりも遂行的義務に解釈されるのが普通であろう。遂行的言い方は失礼になるので、聞き手への対人配慮から、ポライトネスの方略を用いる。その方略の1つとして受動態にして主語を非人間化することで義務の対象が誰であるか明示しない方法がある。これは消極的ポライトネスの1つで、Iやyouの人称代名詞が現れないという形をとる。その方略が用いられた文が5.3であるとも考えられる。

Iやyouの人称代名詞を用いない方法は、受動態にすること以外にも多く考えられる。例えば、5.2の文は次のように表現することも可能である。この文では義務の意味がかなり強くなり、遂行的にも解釈できる。

(5.4) You must protect clay pots from severe weather...

ポライトネスの方略を用いて、主語を2人称から3人称無生物へと代えることによって、本来、遂行的用法であるものが動的用法と解釈されることがある。そして、その場合に、動的意味では義務の強さは非常に弱くなり、話者の関与が薄くなる。法助動詞の遂行的用法と動的用法の区別には何を主語にするかという問題があり、その言語使用の背後にはポライトネスの問題がある。ポライトネスへの配慮が行われた場合

には話者の関与は弱くなる。実際のコーパスにはこのような話者の関与の少ない例が多い。次の引用からも明らかなようにWestneyはコーパスの分析結果から、mustの基本的な意味は「話者による主観的義務」であるという見解に否定的である。主観的というよりも「無条件の強い義務」を表すのがmustであると考えているようである。

Must, as has been emphasized, is used to present a maximally unqualified requirement. The speaker's normal commitment to the validity of his utterances may suggest that *must* expresses the speaker's requirements, but this is not necessarily the case and there is no indication that it is even the norm; in fact, the opposite can be the case. Typical uses of *must* may, variously, suggest that the requirement is irresistible, immediate, urgent, moral or unique, for example, but *must* can also indicate the speaker's understanding, whether or not sympathetic, of an externally defined situation. [Westney (1995): 127]

コーパスによる大量のデータの統計的処理だけではなく、個々の用例を、義務の内容だけではなく、発話の状況・聞き手と話し手との関係を十分に考慮して、mustと3人称無生物主語の用例をボライトネスの観点から見直すことが必要である。

5.6 I must...の談話機能と自律性

話者の主観的義務を表すmustが1人称主語をとるとき、話者が自ら進んで義務を課することになる。このような意味をもつ“I must...”は個人の自律性と自己主張を重んじる文化の中で好ましい表現として多用されてきた。I must say / admit / confess...のように主張を表す遂行動詞が用いられる慣用表現では、この表現のあとに続く伝える内容が話者に好ましくないものであっても、聞き手に好ましくないものであっても個人が考えたことや知りえた事実を表明する話者の意思を示し、また、どうしても言わなければならないことを表明する話者の自主的な態度を表す。

“I must...”のあとにつづく遂行動詞の内容が聞き手に負担になることや聞き手を拘束するような場合には、その遂行性が強く感じられる。聞き手に負担になることをあえて話者の義務として述べることは、負担になることを遂行するように聞き手に要求していることを含意するためである。mustを用いることによって、mustが伴わない

命令文のような直接的発話行為よりも間接的になるので丁寧な言い方になる。さらに、mustは話者がそうせざるを得ないのは話者の責任でないということや、話者が躊躇していることを表すことができる。つまり、聞き手に不利益になることを伝える際の話者の態度がこの表現には表れていると言える。それとは逆に、遂行動詞の内容が聞き手に利益をもたらすときは丁寧な申し出になり、その遂行性は弱くなる。聞き手にあることを遂行することを本来要求するものではないからである。自ら進んで自分に義務を課する“I must...”という表現は自律性とボライトネスの原理が複雑に交差している発話となっていて様々な談話機能を果たすことが予想される。

“I must...”が自ら進んで義務を自分に課するという意味が果たすもう1つの機能は、話者が自ら決意したことを伝えることであろう。義務が話者とは関係なく外から与えられたものであったとしてもそれを自ら主体的にその義務を受け入れていることを示すときに“I must...”が用いられる。このようなmustの使用は、mustの義務の源が話者であるという意味を不明瞭にしていると考えられる。

“I have to...”は義務があることを客観的に述べるだけであるのに対して、“I must...”という表現は、個人の自律性という文化的価値を明瞭に表している。話者が自ら選びとった義務であり、聞き手はその話者の意思を尊重しなければならない。“I must go”という慣用表現が丁寧な言い方になるのはこのためであろう。

5.7 文体の違いとボライトネスへの配慮

mustとhave toの用法の区別をさらに不明瞭にしているのは文体上の使用域の違いである。have toは口語的であるために、形式ばった文語ではあまり用いられない。そのために、口語ではhave toが適切の場合でも、文語ではmustが用いられる。Westneyはこのような文体の違いが両者の用法をばやけたものになっていると考えている。

しかし、文体上の違いだけではなく、ボライトネスへの配慮も関係しているように思われる。形式ばった文語やジャーナリズムでは、一般的な多くの人を対象にしたものであり、発話の目的は情報の伝達や提供である。次の例はWestneyが公式の通達(official notices or announcements)なのでmustが用いられていて、通達の作成者

の意思が読み取れる。

(5.5) Passengers must cross the railway line by the footbridge. (public notice)
[4.4.3.1]

この通達の内容は形式ばらない状況では次のように have (got) to が用いられると Westney は述べている。

(5.6) You have to / You've got to use the bridge to get across the line.

Westney は 5.6 の文が口語的であるために must は用いられないだろうと考えている。しかし、文体だけの問題ではなく、主語が乗客一般を指す passengers から 2 人称 you に変わっていることにも注意しなければならない。must を用いると話者が聞き手に義務を課することが含意され聞き手の face を脅かすことになる。聞き手の face を脅かさないようにするポライトネスへの配慮から 5.6 では must が用いられないとも考えることができる。

5.5 のような情報伝達を目的とする書き言葉の談話では、読み手へのポライトネスへの配慮はそれほど重要ではない。そのような談話は聞き手にだけ義務を押し付けるものではないからである。must は口語から文語まで広く用いられるが、must が用いられる談話がどのような種類のものであるかによって、ポライトネスへの配慮の違いが生じる。文語ではポライトネスへの配慮が必要ないために、口語的な have to の代わりに must が用いられるのである。

6. まとめ

外的な義務の存在を客観的に報告する have to では、基本的に対人関係への配慮をする必要がない。話者が関与しない独立した義務を表すからである。それに対して、話者の主観性を含意する must は話者が聞き手に義務を課することになるため、あるいは聞き手に課される義務に共感していることを意味することから対人関係への配慮からポライトネスの方略が用いられる。聞き手の face に配慮して様々な方略が用いられるのは、アングロ文化では、話者が聞き手に義務を課することは、個人の自律性を侵害することであり、それは英語文化では重大な逸脱行為である考えられているからである。ポライトネスへの配慮のために、must が義務の強弱や客観性

と主観性の間で多義性を示している。聞き手への配慮は、本来、話し手が義務を課するような場合でも must ではなく、have to を用いて義務の源が話者ではない、あるいは義務に共感していないということを示唆するという形でも現れる。

さらに、must が 1 人称主語と共に用いられた場合は、個人の自律性という文化的価値を表す表現になり、様々な談話機能をもつ慣用表現を生み出している。個人の意思・判断を表明することを尊重するアングロ文化の中で、must の持つ「話者の主観」という意味が個人の意思を明示する語として多用されてきたことを物語っている。

参考文献

- Bach, K. and R. M. Harnish. 1979. *Linguistic Communication and Speech Acts*. MIT press.
- Brown, P. and Stephen C. Levinson. 1987. *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge University Press.
- Coates, Jennifer. 1983. *The Semantics of the Modal Auxiliaries*. London: Croom Helm. [『英語法助動詞の意味論』澤田治美訳 研究社出版 1992.]
- Cole, P. and J. L. Morgan (eds.) 1975. *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*. New York: Academic Press.
- Fraser, Bruce. 1975. "Hedged Performatives". Cole and Morgan (eds) *Syntax and Semantics 3: Speech Act*.
- Larkin, D. 1976. "Some Notes on English Modals," in J. D. McCawley (ed.) (1976), 387-398.
- Leech, Geoffrey N. 1983. *Principles of Pragmatics*. Longman Inc, New York.
- Leech, G. and J. Coates. 1980. "Semantic Indeterminacy and the Modals", In S. Greemberg, G. Leech and J. Svartvik (eds.) 1980. *Studies in English Linguistics for Randolph Quirk*. London and New York: Longman, pp79-90.
- McCawley, J. D., ed. 1976. *Syntax and Semantics 7: Notes from the Linguistic Underground*. Academic Press, New York.
- 中野弘三 1993 『英語法助動詞の意味論』英潮社.
- Palmer, F. R. 1979. *Modality and the English Modals*. Longman Group UK Ltd.
1986. *Mood and Modality*. Cambridge University Press.
1990. *Modality and the English Modals*. 2nd ed. Longman Group UK Ltd.
- Sinclair, J. 1990. *Collins COBUILD English Grammar*. William Collins Sons & Co., Ltd.
- Tregidgo, P. S. 1982. "Must and May: Demand and Permission". *Lingua* 56, pp75-92.
- Westney, P. 1995. *Modals and Periphrastics in English*, Max Niemeyer Verlag, Tübingen.
- Wierzbicka, Anna. 2003. *Cross-Cultural Pragmatics: The Semantics of Human Interaction*. Mouton de Gruyter.
2006. *English: meaning and culture*. Oxford University Press.